

川口 の 教育



【 東本郷小学校 ～文化庁支援事業「王様の耳はロバの耳」観劇～ 】

第 6 6 7 号

【目 次】

指導の手引	日本語指導 「日本語指導が必要な児童生徒への支援の充実について」 川口市教育局学校教育部指導課 指導主事 佐藤 彰典 (2)
私の教育実践	「技術を工夫し創造する実践的な態度の育成を促す授業実践 ～ICT を活用した「生物育成の技術」の授業を通して～」 川口市立芝西中学校 教諭 内村 昌史 (3)
教育ルポ	 (4)

12 月号
—令和6年—

編集・発行 川 口 市 教 育 委 員 会

1 はじめに

本市には、外国にルーツをもつ児童生徒（以下、児童生徒）が多数在籍しており、日本語指導を必要とする児童生徒数は1,500名を超えている。居住地域も市内全域に広がっており、ある日突然、外国からの転入・編入生がやってくることは、どの学校、学級にも起こりうることである。

このような現状を受けて、本市では日本語指導教員を計画的に配置するとともに、日本語初期指導教室の拡充や日本語指導支援員のサポート派遣、外国人児童生徒支援員の配置などの支援を進めている。しかしながら、児童生徒が通常の授業を離れて、日本語指導を受ける時間は週に数時間で、それ以外のほとんどの時間を在籍学級で過ごすことになる。そのため、児童生徒自身が「学級の一員として認められている」と感じ、「先生や友達と日本語で話したい」という気持ちが生まれなければ、日本語を学びたいという意欲も向上しがたいと言える。

そこで、ここでは教職員が基本的な知識としてもっていただきたい言語習得に関わる発達段階の特徴や、効果的な支援に繋がる手立ての一部を紹介する。

2 言語習得に関わる発達段階の特徴

発達の段階	言語習得の特徴と適した指導法
小学生・前半 1～3年生 程度	<特徴> 日常生活の日本語使用場面でシャワーのように自然な日本語を浴び、その<u>表現と場面との関係で丸ごと覚える。</u> <指導方法> <u>文法説明はあまり有効ではない。</u>児童の生活に関連のある具体的な場面とともに日本語を聞き、その表現を繰り返し使って活動する経験を通して習得する。
小学生・後半 4～6年生 程度	<特徴> 言語を分析する力が一定程度発達しており、具体的な場面での<u>日本語使用例を聞いたり補助的な説明を受けたりして規則を理解</u>することができる。 <指導方法> 理解した日本語を実際の場面や興味のある内容に<u>関連付けて使う経験を通して習得させる。</u>
中学生	<特徴> 言語を分析する力や文法規則を応用して使用する力も発達しつつあり、<u>用例と説明を受けて意味や規則を理解</u>することができる。 <指導方法> 理解した日本語を状況に合わせて使用する練習を通して運用力を高める。

3 効果的な手立て

<手立て1> 指示はやさしい日本語で行う。

指示や発問は、シンプルで、伝わりやすさを考慮する。例えば、「このお話には、どんな人が出てきたか、わかるかな。」よりも「このお話には、だれが出てきましたか。」と、中心的な内容をストレートに伝える。

<手立て2> 非言語コミュニケーションを活用する。

話し手の表情や声のトーン、身振り等から児童生徒に伝わる情報は多いため、伝え方にメリハリをつけるとともに、会話をするときはアイコンタクトを意図的に多くとる。非言語情報の重要性を認識した上で、言語情報を一致させることが大切である。

<手立て3> 視覚資料を活用する。

児童生徒が見慣れていない事物を言葉だけで説明しても、理解するのは難しい。実物や写真、動画など、さまざまな視覚資料を活用して、学級全体が参加できる活動を考える。

<手立て4> 母国の知識と結び付ける。

児童生徒がすでに知っている内容と比べたり関連付けたりすることで、理解を促進できることがある。教員が「〇〇さんの国ではどうでしたか。」「〇〇したことがありますか。」等、文章の内容とすでに知っていることを結び付けられるような問いかけをすると、日本語の理解の助けになることが多い。なお、親子間の豊かな意思疎通の阻害や、児童生徒のアイデンティティ形成への悪影響、母語喪失の可能性があるため、家庭でも日本語のみで生活することを勧めることは適切な手立てとは言えない。



<手立て5> ICT機器を活用する。

国語科などルビ付きの教科書データがある教科は合理的な配慮として積極的に活用する。またGIGAスクール端末上での翻訳も効果的である。ただし、誤訳を防ぐため日本語の主述関係を明確にし、ストレートな表現を心がける。

4 おわりに

「教師は最大の言語環境」と言われるが、これは日本語指導の充実を進める上でも大切であり、誰にとっても分かりやすい授業づくりをすることが、日本語指導充実のための手立てに繋がることも多い。引き続き、お互いが尊重・理解し合いながら、一人一人が輝く授業の実践をお願いしたい。

【参考資料】

- ・外国人児童生徒受入れの手引改訂版（2019年3月文部科学省総合教育政策局）
- ・光村図書 みつむら Web magazine
「日本語指導が必要な子への支援」



「技術を工夫し創造する実践的な態度の育成を促す授業実践
～ICTを活用した「生物育成の技術」の授業を通して～」

川口市立芝西中学校 教諭 内村 昌史



1 はじめに

「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説」の「2 技術分野の内容構成」では、学習過程の各内容を「（1）生活や社会を支える技術」「（2）技術による問題の解決」「（3）社会の発展と技術」とし、学習過程と、各内容の三つの要素及び項目の関係は下記表のように整理されている。

「（1）生活や社会を支える技術」から「（3）社会の発展と技術」における実践を「B 生物育成の技術」を通して紹介する。

■技術分野の学習過程と、各内容の三つの要素及び項目の関係

学習過程	既存の技術の理解	課題の設定	技術に関する科学的な理解に基づいた設計・計画	課題解決に向けた制作・製作・育成	成果の評価	次の問題の解決の視点
学習過程	技術に関する原理や法則、実験や観察の仕組みを理解するとともに、技術の見方・考え方に気づく。	生活や社会の発展と技術に関する問題点を発見し、それらに関する課題を設定する。課題を設定する際には、問題の背景や課題の範囲を明確にする。	課題の解決に必要な科学的な理解に基づいて、設計・計画を立てる。設計・計画は、課題の解決に必要な要素を明確にし、課題の解決に必要な要素を明確にする。	設計・計画に基づいて、制作・製作・育成を行う。制作・製作・育成は、課題の解決に必要な要素を明確にし、課題の解決に必要な要素を明確にする。	制作・製作・育成の結果を評価し、課題の解決に必要な要素を明確にする。	技術に関する問題点を発見し、それらに関する課題を設定する。課題を設定する際には、問題の背景や課題の範囲を明確にする。
要素	生活や社会を支える技術	技術による問題の解決	社会の発展と技術			
項目	A 材料と加工の技術 (1) 生活や社会を支える材料と加工の技術	(2) 材料と加工の技術による問題の解決	(3) 社会の発展と材料と加工の技術			
	B 生物育成の技術 (1) 生活や社会を支える生物育成の技術	(2) 生物育成の技術による問題の解決	(3) 社会の発展と生物育成の技術			
	C エネルギー・資源の技術 (1) 生活や社会を支えるエネルギー・資源の技術	(2) エネルギー・資源の技術による問題の解決	(3) 社会の発展とエネルギー・資源の技術			
	D 情報の技術 (1) 生活や社会を支える情報の技術	(2) ネットワークを利用した双方向性のあるコンテンツに関するプログラミングによる問題の解決 (3) 計画・制作に関するプログラミングによる問題の解決	(4) 社会の発展と情報の技術			

2 技術の見方・考え方を習得させる工夫

「（1）生活や社会を支える技術」では、「技術の見方・考え方」に気付かせながら、課題の解決に必要な知識・技能を習得させている。

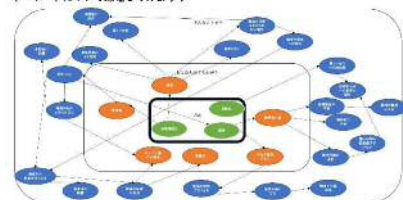
具体的には生活の中で実際に目にする生物育成の技術における環境調整の様子を写真から読み取らせる活動を通して、生徒に生物育成の技術の仕組みや役割等を、上記ワークシートを活用し科学的に理解させた。また、日本が抱える生物育成技術の問題点について考え、品質・収量や安全性等に配慮しながら社会からの要求に応じていくためにどのような栽培技術を活用していくかを検討させた。

3 技術によって問題を解決できる力の育成

「（2）技術による問題の解決」では、「日本における生物育成技術の問題を解決する方法の検討」を課題とし、生徒が見いだした問題から課題を設定し、その解決に向け、作物を育成する方法を検討させた。

課題設定の場面では、具体的には提示した問題点から関連するキーワードをつなげ、イメージマップを作成し、問題を深堀し（誰が？どんなことで？等）明確化することで課題設定をしやすくした。

問題は大きくなるとどんな人がどんなことで困るだろう？
キーワードによって深堀してみよう！



管理作業では、作物の状態に応じ、作業を生徒自らが調整できるよう、必要な資材を作物近くに配置し、生徒が必要なタイミングで作業できるよう工夫した。

4 技術と社会との関わりを考える力の育成

「（3）社会の発展と技術」では、自己の栽培実習を振り返るだけでなく、自らの問題解決の結果と過程を振り返り、今後の社会の発展において、様々な技術の見方・考え方を働かせた上で、「スマート農業」等の今後社会を築く技術の在り方について提言する活動を行った。主語を「自分」から「地域・社会」と変化させることで、社会を広く見つめなおす視点が広がり、技術を客観的に評価し、今後の技術の在り方を提言できる生徒が増えた。

5 ICT活用した個別最適な学びの実現

授業資料は生徒の考えを深化させる貴重な資料である。この資料を最大限活用するため ICT を活用して授業実践を行っている。

①資料を Teams 上に掲載しておき、生徒が自分のタイミングで資料にアクセスでき、学習を進めることで、授業後も、振り返りや、新たな発見につながる。欠席した生徒に対する学習支援としても活用できる。

②実習や実験といった作業が伴う場面においては、予め実習の流れや実験の進め方を動画にしておく。前時までに生徒に動画を閲覧させ見通しを持たせる。

③授業における課題を紙媒体だけでなく、Word や PowerPoint 等を活用してタブレットでも取り組めるようにし学習方法を生徒が選択して行う。

④日本語が母国語でない生徒に対して、翻訳サイトを活用し、自分の表現したい内容を翻訳し、それを活用して課題を行う。

個別最適な学びを意図的に授業に組み込み、多様な学習方法を提示することで安心して学習に参加できる生徒が増加した。授業時間中での活動時間をより捻出することができ、授業中の模型や実験器具・工具の注意点にも理解を深めることができた。

6 おわりに

今後の社会は変化が激しく、予測困難な社会になるとされており、その社会に対応できる生徒の育成が必要となる。授業数に限りがあり多くのことを短時間で理解し自分の考えを表出できるよう教員が授業を考え、生徒は自らの学習を自らでデザインして行うことができるよう指導を行う必要がある。授業の中心は「生徒」にあり、生徒が自らの考えや学んだことについて授業後の休み時間にキラキラとした目で周囲と議論する、そんな姿がより多く見られるよう今後も研鑽に努めていきたい。



東 領 家 小 学 校



安井息軒顕彰会とのオンライン授業



1年生おぼろ



1年生おいもパーティー



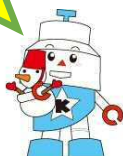
安井息軒記念館館長来校



科学館出張授業 6年生太陽観測



体験活動は、自然や人、社会とのかかわりについて、五感を通じて、楽しく学ぶことができます。



科学館出張授業 科学クラブ



低学年移動図書館見学



中央図書館出張授業